

## 金沢星稜大学創設50周年記念事業人文学部シンポジウム 「装いの文化—北陸と世界をつなぐ」の開催を終えて

山田 孝子<sup>†</sup>, 小磯 千尋<sup>‡</sup>

「裸のサル」と呼ばれる人類は、世界中のさまざまな環境に進出する中で、植物の樹皮や繊維、動物の毛や皮などさまざまな自然素材を見出し、加工技術を開発し、土地固有の「装いの文化」を作り上げてきた。「装いの文化」成立の背景には、植物の樹皮を叩く、動物の皮をなめすから植物の繊維や動物の毛を紡ぎ、織るなどの自然素材の加工技術の開発がある。染めや刺繍・アップリケといった布地・皮の装飾のための技術には、民族独自の工夫がうかがえ、装い方には、日常/非日常といった宗教性もふくめ、民族それぞれの思いが込められる。

2017年10月28日(土)13:00~17:30の日程

で、金沢星稜大学創設50周年記念事業の一環として人文学部シンポジウム「装いの文化—北陸と世界をつなぐ」を、金沢星稜大学グローバルコモンズ4階で開催した。このシンポジウムは、4名の招待講演者による発表とディスカッションというプログラム(表1)に加えて、特別展示「更紗:井関コレクション、加賀のお国染め:花岡コレクション」、さらに「触れる」ことをとおして知る「装い」をテーマとする民族衣装展示の同時開催という形で行ったものである。(写真1, 2, 3)

シンポジウムは、第1に、このような素材の加工技術、製品化技術、装い方に着目し、

表1. シンポジウムのプログラム

12:00~13:00	受付
13:00~13:10	開会の辞(趣旨説明, 学長・学部長挨拶)
13:10~14:00	井関和代(大阪芸術大学名誉教授) 「更紗がつなぐ装いの文化—インドからヨーロッパ, アフリカ, そして日本」
14:00~14:40	金谷美和(国立民族学博物館外来研究員) 「装いからみるインド社会—絞り染め布をつくる・まとう」
14:40~14:50	(休憩)
14:50~15:30	鈴木清史(日本赤十字九州国際看護大学教授) 「伝統と近代のつむぎかた—アボリジニと装い—」
15:30~16:10	大井理恵(石川県立歴史博物館学芸主任) 「加賀・能登のくらしと装い」
16:10~16:30	休憩 “触れる” タイム
16:30~17:30	ディスカッション
12:00~17:30	特別展示「更紗:井関コレクション, 加賀のお国染め:花岡コレクション」

<sup>†</sup> ytakako@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

<sup>‡</sup> shunya@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)



写真1：特別展示



写真2：特別展示



写真3：民族衣装の展示

「装いの文化」を作り上げてきた諸民族の英知を再確認し、人々が「装う」ことの本来の意味を問い直すこと、第2に、北陸地方の事例をとおして、日本独自の文様、素材、パターン、形などの意味などを再確認し、比較文化的に「装いの文化」にみる北陸と世界とのつながりを考えることを目的に開いたものである。

各講演者には、以下の抄録が示す内容で発表を行っていただいた。

### 1) 井関和代による「更紗がつなぐ装いの文化―インドからヨーロッパ、アフリカ、そして日本」

「衣」は、「食」「住」とともに古代から生活文化の中心的要素である。そして、古代染織技術史の分野では、「衣」に用いられた繊維素材で文化地域を区分する。例えば、ナイル河流域では亜麻、チグリス・ユーフラテス河流域では羊毛、インダス河流域では木綿、また黄河・長江(中原)流域では絹・麻、とする。

現在、確認されている最古の繊維資料は、エジプトのファイユーム遺跡(B.C.4200代)から出土した麻布である。メソポタミアからは同年代の垂<sup>つじ</sup>や粗い麻布などが見つかっているが、その確認は少ない。ただ、壁画などに遺された当時の衣裳、例えば、エジプトのベニハッサン墳墓(B.C.2050-1780頃)に、文様のある鮮やかな衣裳を纏うシリア商人と白い腰巻姿のエジプト人が描かれ、その装いの相違を知ることができる。インドはワタ(*Gossypium* spp.)の原産地にふさわしく、モヘンジョ・ダロ遺跡(B.C.2500-1500)の木綿の裂布が出土しているが、資料の多くは生産国インドよりも、むしろ、周辺諸国から発見されている。中国では河姆渡遺跡(B.C.5000-3300)から多くの織資料が発掘され、また戦国時代の長沙遺跡から絹織物、漢時代の絹織物の錦・綾・羅布が、遠く離れた新疆ウイグル自治区のアスターナ遺跡や外モンゴールのノイン・ウラ遺跡、シリアのバル

ミュラ遺跡などからも出土している。

古代の繊維製品は、凍土や砂漠地帯から出土するが、土に埋もれた繊維類は土壌や湿気などに侵されて、その残存が少ない。しかし、その僅かに遺された資料から古代交流の様相が窺える。

このような古代染織技術史について、角山幸洋は「中国の織技術の先進性は否めない事実である、とくに繊細な絹糸で織り出される製品はそれに伴う織技の影響は、旧来の技法を一新させたのである」[角山 1968:18], という。

そのような物流や多くの革新的な技術をもたらした東西交易路には、「陸路」と「海路」の二つある。だが、我が国では陸路・シルクロードの名に掻き消されるように、東シナ海からアラビア海を結ぶ「海路」が一般的ではない。とくに、インドからヨーロッパを繋いでいた交易路の情報は少なく、14世紀半ばから17世紀半ばまで、ヨーロッパ人たちがアジアやアメリカへの進出した「大航海時代」まで待たねばならない。それは、世界各地の人びととモノとが海でつながり、文化が巡る時代への幕開けであった。イギリスやスペイン、ポルトガルなどで設立された東インド会社は、マラッカ諸島の香辛料を求めて、インドや東南アジアの各地で覇権を争うことになるが、香辛料を求める重要な交易品がインドで製作された染織布である。

インドで製作された色鮮やかな布は、東インド会社によって多くの国々に運ばれた。西へと渡った布はアフリカ大陸を経てヨーロッパに至り、産業革命の引き金にもなった。東へはインドシナ半島やインドネシア、中国、日本へもたらされ、それらのインド布は各国の染織文化に強い影響を与えた。

本講演では、これまでの染織調査で垣間みることのできた東西交易、とくに、インドの「更紗」を事例に、装いの文化の背景について紹介する。

## 2) 金谷美和による「装いからみるインド社会—絞り染め布をつくる・まとう」

インドは豊かな衣装文化をもった国であり、それを生みだしているのは、素材や染め織りの技法の多様さであろう。それに加えて、衣装の選択に社会的規範が関わっているということがある。宗教やカースト、民族などの社会集団、男女の区別、どのような人生過程にあるかなどと結びついて、着るものの決まりがあることが、多彩な衣装をうみだしている。

発表では、カッチ地方の衣装について、つくる側と着る側の観点から取り上げる。カッチ地方は、染めによる衣装文化の発達した地域であり、そのなかでも「絞り染め」という手仕事による染め技法によってつくられる衣装を事例として紹介する。絞り染め布をつくっているのは、カトリーという染色職能集団であるが、彼らは400年にわたってこの地域で染色業に従事してきた。カトリーは、さまざまな集団の衣装を「染め分ける」ことで、社会集団を可視化してきた。

染め布のなかでも、とくに絞り染め布は、ハレの場で用いられる用途に用いられてきた。女性の婚礼用衣装、婚礼時に実家の贈る寝具、男性の祭礼用ターバンなどであるが、このうち、女性の婚礼衣装としての用途の布は、いまでもつくり続けられている。ジェンダー役割や吉祥と結びついた色柄は女性に好まれ、絞り染めのサリーやスカーフはファッションの潮流をうみだしており、手仕事一般の工程の多くが機械化されるなかで、手で「括る」工程は絞り染めの核心として続けられている。

手仕事の技法により作られてきた布が大量生産されるようになることが、着る文化をいかに変容させてきたかについても取り上げる。手仕事による染色が継承される一方で、絞り染めの文様が、「捺染」技法によって複製されるということが行われるようになってきている。かつては、布に色柄をつけることは、特定の材料や

それにあわせた専門技術が不可欠で、手間がかかり贅沢なものであった。しかし、同じ文様を繰り返すつくりのために、まず手仕事による木版捺染がおこなわれ、次にスクリーンプリント、さらには機械による捺染に展開し、木綿布の機械による紡織とあいまって、色柄のついた布の大量生産が可能になってきている。

それによって、模様染めの衣装を常に身に纏い、かつ流行にあわせて頻繁に新しい衣装を購入するという衣装文化があらゆる人々にとってあたりまえになった。かつては、社会的規範に沿った衣装を着用していたインド社会においても、好みや流行に沿った衣装を着ることがあたりまえになってきており、手仕事の染色に従事していたカトリーたちは、大量に染色できる技法に転換して、染色をおこなうようになっていく。

この潮流には、功罪両面を指摘することができる。ファッションが、あらゆる人にひられ、誰でも好みの衣装を着られるようになることは喜ばしいことといえるが、衣装の消費主義を引き起こしている。世界的なファストファッションの流行と流れを等しくするように、インド的ファストファッションも現れている。それを批判するように、手仕事による衣装文化の再評価もおこっている。

### 3) 鈴木清史による「伝統と近代のつむぎかた—アボリジニと装い—」

オーストラリア大陸の先住民はアボリジニと呼ばれている。これは、18世紀後半に植民地開発のために渡来した英国系ヨーロッパ人が、先住民を「もとの住民」を意味する英単語(aborigine)で呼びはじめ、それが定着したことに由来する。

英国系入植者による植民地そしてその後の国家建設の過程で、アボリジニは「忌み嫌うべき」存在として差別的に扱われた。特に、入植者が集中し、今日主要都市が点在しているオー

ストラリア大陸の南東部海岸線では極端な先住民排除が行われ、先住民人口は激減した。生き残った人びとも、入植者がもたらしたヨーロッパ的生活様式への同化政策にさらされ、固有の文化を奪われながら社会の下層に追い込まれていった。

アボリジニの存在が注目されるようになったのは、1960年代に少数派の人権意識が高まったときであった。そして1980年代初頭にオーストラリアが多文化主義を国是とすると、アボリジニ文化は同国の「国民的遺産」として位置づけられた。これにより、先住民文化への評価は大きく転換した。それが象徴的に示されたのは2000年のシドニーオリンピックであった。大会のロゴマークは、先住民の狩猟採集道具であったブーメランを組み合わせた選手の姿であった。また開会・閉会式の祭典では、音楽や踊りをはじめとして先住民の文化が多様にちりばめられていた。いまや、アボリジニの文化は国民的象徴として国内外で受け入れられている。

今日シドニーやメルボルンのような大都市で生活するアボリジニ系住民は、いわゆるオーストラリア的生活に溶け込んでいる。かれらを外見から見分けるのは難しいことが多い。しかし、「装い」という視点からアボリジニを眺めてみるとそれなりの現象があることが分かる。1つは、かれらが民族としての自らの存在とオーストラリアにおける歴史的経験の証を衣服の一部として身にまったりすることである。

アボリジニは自分たちの人権回復を求める運動の中で、民族としての団結と独自性を表象する旗を考案した。それは赤黒黄の3色からなる。オーストラリアの公的な施設には、この旗が掲げられていることが多い。そしてアボリジニ系市民は折に触れ、これらの3色を衣服に織り込んだりして、自分たちの存在をアピールする。

もう1つは、アボリジニが長い歴史の中で

はぐくんできた色彩やデザインが、衣服をはじめとするファッションに取り入れられるようになってきていることである。それは、アボリジニ・デザインと呼ばれたりしている。この特徴は、アボリジニの伝統的要素とヨーロッパ系住民がもたらした近代的な要素がむぎあわさされていることである。アボリジニ・デザインの製品は多岐にわたり、国内の消費者ばかりか、海外からの観光客にも受け入れられている。加えて、アボリジニ自身が手がける製品は、かれらの経済的自立にもつながりえる。発表では、アボリジニの装いをとおして伝統と近代の織りなし方、そして知的財産としての固有性を保護する事例も紹介する。

#### 4) 大井理恵による「加賀・能登の暮らしと装い」

まず、くらしと織物として、麻を利用した自家用の布の製織（平常着・労働着）を取り上げる。麻は、もともと鹿島・羽咋両郡において盛んで農家の女性の副業として、苧絹（麻糸）生産（近江上布の原料）に利用されてきたものである。しかし、幕末・明治期になると、商品としての布生産と発展し、各所で生産され、「能登上布」として知られていく。また、縞柄・緋の技術導入が行われ、板締めにより緋糸を染めて柄組みしたものも登場する。

一方、絹をみると、加賀絹（小松絹）の生産は加賀藩による保護をうけたこともあり、様々な染物が発達し、「加賀染・御国染」とよばれるようになる。また、白山麓では、現金収入源としての繭・生糸生産（「出作り」）による養蚕が行われてきた。商品にならない玉繭や屑繭では自家用の紬（紋付や外出着）がつくられたが、これが今日の「牛首紬」としての商品化につながっている。

さらに、木綿をみると、加賀・能登地方が栽培に適さないこともあり、生産が少なかった。このため、上方からの糸・布が流通し、いわば、

リサイクル衣料「裂織」が発達したのであった。労働着を指す語「サックリ」は、この「さきおり」が語源であるともいわれる。そのなかで、小松市今江町を中心に生産された木綿織物「今江縞」は平常着・労働着として流通してきた。

その他 野生の藤蔓を加工した、丈夫で水を弾く藤布（ダコ）を用いて、衣料・敷物の縁取り・脚絆・蚊帳などが生産された。能登地方で盛んであったことが知られ、能登島の藤たくりの船や、旧柳田村の弓引き祭り衣裳などが知られる。さらに、アカソ（オーロ）、オクソ（麻糸を作る際に出た屑）などの利用もみられた。

以上の伝統織物は、伝統工芸品・特産品としての継承あるいは奥能登の藤布や今江縞の復活への取り組みなどにみるように、今日継承の取り組みをみることができる。

第2に、「加賀染」を取り上げる。これには、つぎのような地域的特色をみることができる。「加賀染」「御国染」といわれるものは、主に近世以降に加賀藩の下で発達した染物であり、これには「梅染」「兼法（房）染」「茜染」「色絵（友禅染）」「藍染」などがある。

色絵（友禅染）といわれるものは、「いろいろ絵」「上絵」「染絵」など（1680年頃～記録あり・加賀の染物の代名詞）を表すものであり、その特徴は顔料の多用にあり、大正期頃までのものをみると色が鮮明で量感があるものとなっている。そこには、「染絵掛幅」の発達とも関連し写実性があり、ちらし文様・小文様が多く、色絵紋（加賀紋）（とくに「祝い」の意匠に）をみることができる。

加賀紋とは、家紋（定紋）の周囲を友禅染による吉祥文様や草花文様で囲んだ加賀独自の紋をさし、兼法染に加賀紋のついた紋付のことを特に「加賀染」ともいわれる。次のような記述をみることもできる。

「加賀染 加賀絹の無地黒染五所紋染を専とす 五所紋家々の定紋に係らず立田川

に楓或は雪月花等常の紋の大きさに種々の彩色染にする」「加賀の外に定紋に彩あること更に無之」(『守貞漫稿』)

第3に、人生儀礼と装い(婚礼を中心に)を取り上げる。「ハレギ」をみると、もともと、白装束/かぶりもの/紋付(裾模様)/新しい平常着(長着)という性質をみることができる。晴れ着は、正月・盆・祭礼・寺参り・法事・誕生・成人・結婚式・葬式等に着用されるものであったが、元々は吉凶による大きな区別は無かったということができる。日常着に対し「ハレの日」に着るものであったといえる。しかし、明治時代以降、農村部の旧家(オヤケ)の娘の婚礼衣裳として、打掛<sup>うちかけ</sup>・お搔取り<sup>かいたど</sup>が使われていたのであるが、これが戦後になると、一般にも着られるようになっていく。婚礼衣裳には、黒・紫・藍・赤・浅葱などの地色に、刺繍による加賀紋・変わり輪紋が加えられ、金糸・銀糸・色糸の刺繍による加飾(松竹梅・鶴亀・鳳凰・名所風景・王朝文様など)が加えられている。

最後に、婚礼を彩るものとして、嫁の象徴ともなる嫁暖簾<sup>よめのれん</sup>(金沢を中心とした加賀地方から口能登・富山県呉西地域)の存在は、加賀地方の大きな特色といえるものである。また、贈答用袱紗<sup>ふくさ</sup>(重掛<sup>じゅうかけ</sup>)、風呂敷(中包・外包)、そして「加賀染」からの伝統の継承した家紋(加賀紋・変わり輪紋)と吉祥文様の様式も、この地方の特徴をなすものといえる。

一方で、「マエカケヨメドリ」「ヒートル」などと呼ばれる能登地方で伝承された古い婚姻形

態といえるハレギのない結婚という形態もあった。しかし、身分や通婚圏、嫁の立場の変化とともに、「引き移り」や「披露」を重視するようになり、人生儀礼の「イベント」化が進み、儀式ごとの衣裳が成立し、象徴としての色・文様・形が発達するようになってきている。

以上の発表からは、人類はさまざまな素材を発見し、加工技術を確立して取り込んできたこと、装いの文化のトランスナショナルな様相が古い時代からすでに始まっていたこと、よりよく「装う」こと、「美」を求める人類の希求の強さ、さまざまな境界を越えて、伝播、拡散することを改めて気づかせくれるものであった。また、コメンテーターの坂井紀公子氏が紹介した東アフリカのプリント更紗の事例のように、装いとなる一枚の布がインテリア、コミュニケーションの手段など多様な機能を帯びさせる文化もあった。

「装いの文化」には、形、色、紋様というデザイン、暮らしの中で、時、場所、場合というT.P.O.、さらには年齢、ジェンダー、宗教による違いというように、それぞれの文化による独自の基準のもと、多様性が生み出されてきたのである。しかも、現在では、装いが民族性の主張、伝統文化の象徴といったように特別な意味をもつ場合も少なくない。「装うこと」には多くの意味が付与されていることが指摘されるものとなった。